

「NHK職員が語る放送のことば・放送の今」を開催しました。

平成28年12月2日（金）、NHK高松放送局放送部長の岸慎治氏を講師に迎え、NHKが長年にわたり追求してきた「伝わる言葉とは何か？」について御説明いただくとともに、NHK（高松放送局）が手掛けている番組等について御紹介いただきました。



冒頭、NHKは自ら現場に出向いて多くの人と出会い、多くの人のお話に耳を傾けるという徹底した現場主義を貫いており、それがNHKの番組制作の根幹であるとお話がありました。

「100年たっても色あせない、100年後の日本人にも見てもらいたい」という願いを込めて作られた番組『100年インタビュー』では、各界のエキスパートと呼ばれる著名人への出演交渉のため、担当者は全国津々浦々、自らの足を使って幾度となく現場に赴き、やっとの思いで出演の承諾を得たかと思えば、その後には、机の上に山積みの気が遠くなるほどの膨大な資料や映像データの入念なチェックが待っており、これらの過程を経てインタビューに臨んでいるというエピソードを御紹介いただきました。

この話を聞き、一つの番組を制作するのに要する苦労とともに、視聴者にメッセージを伝えるということが、いかに大変で難しいものであるかを、受講者は改めて認識したものと思います。



また、アナウンサーとして必要不可欠な技術である「話すように読む」とは具体的にどういったことなのか、受講者に体感してもらうため、実際のニュース原稿を使って、「音の高低」・「息を使い切る」・「意味を考えて読む」技術について、音読や発音練習をしてもらいました。最初のうちは、うまく読めなかった受講者も、何度か音読を繰り返すうちにスムーズに音読できるようになり、

普段何気なく聞いているニュース一つをとっても、そこには、伝え手の人間性や伝えたい情熱、経験や知識等が込められていることを実感できたものと思います。

講義終了後の質問時間には、今後のNHKに対する要望が多数あったほか、NHKの番組をくまなくチェックしている視聴者だからこそ鋭い質問もあり、講師が返答に窮する場面もありましたが、このことは公共放送を担うNHKに対する期待の大きさの現れでもあり、今回の受講を機に、多くの方がより一層、NHK（高松放送局）の番組やニュースに興味を持たれたのではないのでしょうか。